

# 真生

第一卷第四號

□近頃の時代苦悶の反動は次第に眞實の宗教を要求するやうになつて來た。これ主として社會組織の變遷と此れに伴ふ人類生活の根本要求から起つて來たと云ふ可きである。

□乍然此の要求は決して今迄のやうな封建的な既成宗教や、形式的な教權主義の宗教に依つて満足するものではない。寧ろ此等の宗教に飽き足らない人類生活の要求であつて、正義と自由との愛の宗教である。即ち宇宙の大道に則り如來の大悲に讃仰するの宗教である。

□宇宙の一員たる我等人類は今や其一員として宇宙的理想實現の第一義に生さんとするの秋であつて、實に人類の宗教的自覺と云ふべきであり、あらゆる文化の中心生命である。

□道徳も哲學も科學も藝術も皆此の生命を中心として初めて存在の意義をなすものである。所謂人類生活の規範であつて聖なる如來を中心とする人格的人類の理想實現である。永遠の平和も眞實の世界も爰に初めて顯はれて來るのである。(念)

# 眞 生

第一卷第四號

祈り如來なり

## 目 次

- 祈りは如來なり
- 耳四郎と私 土屋 觀道
- 辨慶の心持 光明教壇より
- 墮執を離れて 自由俱樂部
- 「吾朋」便り
- 多聞寮より

○一つの花の生命すら本當に畫かく事は難い。  
○色や線を何の様に配合したとて自分の心は決して  
掴む事は出来ぬ。それを辿りて窺ひそれを通して勾  
ひを送つてゐるだけだ。  
○自分の私達を得んとするならば大膽に私達を抱く  
より外なからうと存じます。想像や推測は餘裕ある  
時の遊びです。そして私達もペールで霞の奥に逃ん  
だり、概念の蜘蛛の巣を張り廻はして隠れは致しま  
せん。  
○事實のドン底を掘りて趣味して下さい。私等と云ふ  
偶像に捉はれず、祈りの當體、如來の眞實に直入し  
て下さい。形や衣装で區別立てして居る様なノンキ  
な時代ではありません。  
○完全なる一個となるが爲めに先づ自己が佛に面接  
する事である。少くとも心意を辱かしめない丈の  
充實さを發揮せねばならん。人と諍ふ前に自己と争  
はねばならん。老婆心と呪ひに驅られる時、自分は  
最早人後に落ちて硬化しかけてゐるのだ。  
○皆が一勢に更生道の勇者となつたとき、其歸趣の  
等しく彌陀の懐に通してゐる事を見出し、そして  
其統攝力に勧められて益々元氣が昂進して行きます。  
す。そして其綜合の上にこそ改造の事實があり、「聚  
りは力なり」「僧は大師なり」と必々喜ばれて來ます。  
○此統一生命、如來の恵みに依つて生き甲斐ある樂  
しみを噛み緊める事が出來ます。

○私等には教へる方は無い。導く方はない。傳道する方は無い。  
○誰が一番高い處に居て他の一切を導き得るものがありませう。完全に  
切の師として純能化たり得ませう。皆んなが獨特の長所を持つてゐます。  
皆んなが先生であり、皆んなが最尊です。悉くを禮拜せずには居れません。  
○綜てに感謝し得る人にして皆んなから一番多く教へられる人となれます。  
それが總てを最も多く導き得る人です。たゞより多くを有する人が教へ得  
るものをより多く持つて居る様に見られるだけだ。獨尊の釋尊は最も大  
なる聞學の人、傾聴の人でした。  
○凡てが持つて居るものを唯だ正直に取り交はしてゆく中に能所を絶して一大  
進化の事實のみが自然と肥立つて行きます。それが如來の「はからひ」とも  
云はれ。如來自身の軀格とも云へませう。  
○教へる教へられると云ふ考へを先づ壊して、たゞ衷なる佛の働きの儘に  
伸びて行きたいと心掛けねばならん。それが自分を最も大切に愛する人で  
あり、他人を最も多く認め尊敬する人である。  
○自分を殺して生きた他人、生きた佛を見やうとしても見れる筈はありま  
せん。自分の裡に生きて居る處だけが生きた佛の部分として取り容れられる  
計りです。自分の全體は大活動を初めるばかりに準備されてゐます。電流  
を通すだけになつてゐます。  
○精進度生の運轉を起す爲めの動力は、自己を覗く事、祈る事に因つて創  
められます。それが賜つた力、教へられる力、教へる力です。

## 耳四郎と私

土屋 觀道

前略……朝夕かすかながら念佛申す時の打ちつゞく事もありますが、不斷相續に成らず、反つて佛を犯すか如き心地さへ致し覺えずお念佛の聲をひそめ、たまらなくて表に飛びだす時が多いのです私は耳四郎の物語を泌々と感じてゐます。罪を犯さずに居られないあの耳四郎に對し生得の報いなければ日頃のわざするなし」と仰せられて居りますお言葉を、小生はどう解釋していゝか全くわからなくなつてしまつたのです。生得のむくいなければ日頃のわざするなし」といつて、此のまゝの淺猿しい生活を正しい生活と肯定していゝものでせうか。どうしやうもない「生得の報い」とあきらめていゝでせうか。

耳四郎は、實は私です。でも、耳四郎はお念佛を申しましたが（その心持はつきりわかりません）小生は恐ろしくて申されません。お念佛と同時に「生得のむくい」が消滅するんでなければ、お念佛を犯す事になります。小生は、解脱即念佛でなければならぬと思つて居るのです。又それであり度いのです。じりじりに行くのでは、ウソ、の氣がするのです。堪へられないのです。先生、此の無智な耳四郎を憐んで下さい。（三月二十日〇〇様より）

〇〇様！或日、私は耳四郎がお念佛申ながら盗みをしてゐた事のお話をした事がありましたね。その時の私は、全く、私が耳四郎になり切つてゐたのでした。何事にも負きらいな私にも、私自身の心の中に起つて来る淺猿しい豪慢や、邪見の心、さては、私自身にさへ恥しいと思ふことなどやつた時、これでよいとはどうしても出来ないのです。まして、其のまゝを人の前などに、全部あらはすことや、又

それを赤裸々に懺悔することなどは出来ないのです。否、今でさへ私自身には「ほんとうの懺悔」といふものが具體的には人前に出来るものかと疑つてゐます。もとより、かゝる悪心ばかり起るといふのはありません。それは、私のやうな愚かな、邪見にみちた心にも佛になると思ふ心さへ起る時もあります。人類の理想だの、眞生の意義など、眞實に自己を反省して、人類の自覺を叫ぶ時が、決して、ないのではないのです。けれども、私には一面之に反する自己内面の罪惡を痛切に感ぜざるを得ない時が度々です。否私には常に、此の両面の白刃の戰場に立つてゐることさへあります。やつぱり耳四郎のやうに、念佛申す間からも、色々の罪惡の心が起つて来るのをどうしませう。さうして、私は此の事のためにどれだけ心を痛めたか殆んど狂せんばかりの時さへありました。乍然、幸にも今は此のさびれたる心も幾分かとれて、如來様の慈光の中に、日夜望みと、力との喜びに念佛申させていたゞいてゐます。いひかゆれば、私の昨今は全く耳四郎そのまゝだと存じます。昔は耳四郎の話に驚いた私も今日では私自身が耳四郎になりきつてゐる時さへあるのです。

乍然 私はこのころ、此の念佛こそ是ぞほんとうの私だと思ひます。かゝる時に出て来る念佛は心から懺悔の念佛となつてゐます。私如きもの、かゝる罪深きあさましきもの、前後もわからぬ無智文盲なものなればこそミオヤにすがらる必要もありませう。否すがらずには居られないではありませんか。善人となつてからなら何もおすがりする必要がありません。又、おすがりする氣にもなれないのです。人には不親切、親切と見せかけても心は丸で畜生のやうな私共、いひかへれば、自分の都合のよい時丈の親切心、私はそれが悲しくて困つたのです。永遠の生命も、無限の向上もあらばこそ、ともすれば生



破るものではありません。乍然、悪人も救はれるといふ事と、善人も救はれるといふ事とは、違ひます。如何なる悪人も、念佛申せば、すぐ救はれるといふことなのです。然るに、悪人でなければならぬかの如く解して、悪人たることを少しも恥ぢない人があつたり、善人たることを少しも望まず、否、望むことを反つて悪いかの如くに思つたりしはせぬか、道徳觀念の低い時代には、どんな悪い事をして、許して貰へるとか、どんな愚人でも、悪人でも、そのまゝでよいとも言はれば、それではといふやうな氣になつて、悪い事を改めやうともせず、又悪人だからとて、無智だからとて、それを少しも辛くも思はず、又別に之以上勉強も修養もしないといふやうな心で、自分の向上心を勵ますこともなく、夫が爲め勉強したり修養したりすれば、それだけ向上の出来るものを、それさへせなくなるやうな事にはなるまいか。どうも、私共の今までの經驗によれば、そのやうな氣がしてならないのです。

然し、如來様が許し給ふとも、又人が許して呉れやうと、悪いことは矢張り悪いのです。又他が如何に之を知らねばとて、かゝる悪事を爲すことは、それ自身に於て、それだけの人格をして、低級たるを免がれることは出来ないのです。して見れば、如何に「生得のむくい」なればとて、夫が正しい生活であるとは肯定せられやう筈はないではありませんか。況んや、夫を以て、憚る處もないとは、最も大なる心得違ではないでせうか。いはば前世の業さらしとて最も自分にも辱づ可きことだと思ひます。乍然、ほんとうに、私共には、この「生得の報い」でないかと思へるほどの罪業の深きを、泌々と考へさせられる幾多の事實を持つてゐることを悲しみます。さうして、どんなに自分で努力しても、しても、遂に如何ともしがたい私共の心のあさましさを感ずる時、それをどうしたらよいものでせうか。

〇〇様、こゝまではあなたも、私も同じでせう。否支那では善導大師、我が國では法然親鸞の如き先徳も、やつぱり此の自己の淺猿しい心に泣かれた方々でした。〇〇様、私共はあれほどの先覺者にも、かゝる歎きがあつたかと、むしろ驚かれる事でありませう。乍然、現に私共自身に於て、かゝる惱みを持つてゐることに氣附けば、反つて之等のお方の言葉が、私共を慰めてくれることがわかります。殊に自分の罪に泣いて、どうしても仕やうのない處を、罪人だの、悪人だの、馬鹿者だのと罵らるゝ時の心苦しさ。〇〇様、あなたは之をどう御覽になりますか。實に、「生得の報い」でもあるのであるが、如何とも仕方のないのであれば、その中からこそ、念佛申すのではないか。それをあなたはいかぬと御棄てなさるであらうか。「そのまゝ來れ」とは如來大悲の叫びです。「そのまゝ」とは、「このまゝ」なのです。善惡そのまゝ、とにかく來い。との如來の勅命なのです。自分のはからい。などで善惡がわからなくなつた處、そこに、南無阿彌陀佛となるのみです。私には此の時、已に、善惡の批判さへ超絶して、唯々私自身が、如來の大悲に南無する許りなのです。念佛外に何物も無い。念佛即解脱。解脱即ち念佛なのです。解脱してからの念佛でもなく、念佛してからの解脱でもなく、又念の心を悟つたの、學問をして知つたのでもなくて、私自身のあさましい心に飽き果てたところの此の私が、如來にすがる念佛の教なのです。此の時、直に蘇生へるのです。念佛が本氣に出る時のみ、私は生甲斐を覺えるのです。耳四郎の念佛も、亦、此の心境ではなかつたか、悪い事してよいのではない、よくないのに、どうしても止められない自分の「生得のむくい」に泣く處、それが直に如來様にあすがりする念佛となさるのです。して見れば、念佛申す上からは、悪い事してもよいといふのではなくて、悪い事はしてならぬとの心が、

一層強くなるのみです。けれども、止め止めんとして、止め能はざる實際の私を、どうしませう。そこには唯々、慚愧と、念佛とがあるばかりです。否、慚愧が念佛に變つて行くのみです。ですから、私共は、自分の虚偽な、そして、日夜に淺猿しい者である、といふ事に氣つけば氣附くほど、ます／＼、如來を離れては、ちよつとも、をれぬといふ事になるのであります。

尤も、あなたの虚偽の念佛、佛と離れた念佛、申せないといふ御心も、私にはよく解ると思ひます。あなたが此の淺猿しい心で、此の上更に、虚偽の念佛や、間斷なき念佛では、いよいよ佛に虚偽を重ねる事であるから、かうしてまでも、佛を犯すことは忍びない。との事でせう。ほんとうに私もさうだと有じます。否、私もそんな時が多々あるのです。けれども、〇〇様、私共は一面、そんな時ばかりでは、決してないといふ事も知つてゐます。確に、時々は如來に歸命し、心から如來に御すがりする経験も幾分か持つてゐます。少くとも、自分の虚偽である事を知ることの出来るといふ事が、已に、眞實の心のある證據ではないでせうか。して見れば、虚偽なり。と氣のついた時には、氣ついた自分は、已に、虚偽の自分では無いのです。そして、此の心が、直に如來に南無すれば、夫が眞實の念佛でせう。虚偽を虚偽なりと氣附いた時、そのまゝ斯るものなればこそ。と念佛に歸するところ、そが私の耳四郎としての念佛なのです。

あなた方は、此の時、念佛が申されないと仰せられますが、此の邊の處、今一度、よく／＼御考察下さいませんか。そこには、必ず何か得る所がおりかと信じます。あなたの恐ろしい、と仰せられるのは、如來がまそろしいでもなければ、又他人が恐ろしいのでもない。自分は自身に於て、此まゝでさへ淺猿しく感じてゐるのに、此の上、虚偽の念佛を申すといふ事が、いかに、自分自身に恐ろしい感がある。とのことでせう。

あゝ〇〇様、私にはそのあなたの御心もちが、私の心の惱みであります。私は私の力の及ぶ限り、如來を中心として、此の私の信するまゝを、あなたにお傳へしたいと存じます。

然らば、どうしたら念佛が申せるか、如來様が眞實に信せられる、念佛となることは何よりも容易い事だと思ひます、けれども、如來様が信せられるといふことが、どこまで如來様を知り得ることかといへば、罪惡生死の凡夫、日夜に愚昧な私共が、どうして眞實に如來様を知り得るか。そこには、自分の愚かさ、淺猿しさに泣く私が、そのまゝの私を「すがれ、救ふ。」との、これ丈の大悲の如來をたゞ信するより外には、之以上の信じ方はありません。否如何に學問して學んだ所でも、又、如何に觀念として知つた所でも、最後の結着は「私を救ひ給へ。」と、如來におすがりをする、いはゞ如來に南無するといふことより外には如來を知ることは出来ません。そしてたゞ、南無する所に、此の南無の心を中心として、はじめてそこに救いの事實が現はれて來るのです。念佛の世界、稱名の實感、そこに南無する事實の靈感として、私共の信仰の深さに應じて、無限に感得せられて來るのです。さうして、此の時、「生得の報い」もそのまゝに、自から消滅するの感がして來るのです。現に、釋尊も、念佛する者は、一切の罪障苦難悉く消罪すると申されてあります。

乍然、念佛申した后からは、一切淺猿しい心も起らぬかといふに、さうではありません。やつぱり、夫から夫へと度々起つて來ることを感じます。乍然、夫は、私の歸する心の淺さが故です。いはゞ念佛

申す事の足りないからに過ぎません。さうして、煩惱深き、なかからも、如來にすがる心が強ければ、之等のものに犯されない、力強い喜びと、望みと、樂しさが、一切の罪障にも打勝つて來るのであります。更に進んで、人類生活の本義に目覺めて、自己本心の大道を壓えんとして壓えることの出來ない力を以て、體現するに至るのであります。はじめのほどは、念佛申さへ物憂かつた私も、今や度々の念佛で、覺佛體現の自覺さへ致すやうになりました。殊に、念佛は、五日、七日と専修念佛の三昧會によつて、一層尊い經驗を味い、朝夕缺かさぬ念佛生活が、始めて、人類生活の眞意義でも充たして呉れるやうになるのであります。終り (二二三・二八)

## 辨慶の心持

— 光明教壇にて —

私はいつもお話しするときは五條橋に立つてる辨慶の氣持で居ります。世間の弱虫を獲て切りにしてやる心持には少しも致しません。いつも自分より偉い敵、自分の教へを乞ひた先生を一人も多く見出すために、夜々教壇に立つて話し掛けるのです。通る人を悉く切り伏せ、教導しやうなと思つて立ち上つた時にはいつまで経つても、是れで十分の實力と思ふ時は來ません。若し其慶氣分を立て居たら恐ろしくて一晩だつて居た溜りません。自らの一番弱き事を信じて素裸になつて師を求めるとき、最も大膽になります。辨慶は九百九十九人を切り殺したよりも、最後の一人に逢つて負けた時の方が何れ程喜んでせう。忠言を聞き閉口せられる程禱しうムいます。又一言の朋を益する事が有つたとしたら互の喜びな何れ程でせう。敵味方を絶して斯う云ふ五條橋で皆んなが相會する事が楽しいのです。それを如來は高い處から瞰下していつも微笑んで居られます。此處は本當に眞劍な組板です。(尅)

## 墮執を離れて

自由俱樂部より

『何處に貧乏しても窮してゐても屹度如來は與へて下さる恵んで下さる』

『困窮のドン底に陥込んで屹度通じさして下さる。實際不思議だ喰ふに困つても決して見殺しにはして下さらぬ。所謂「見殺」にされたと思つてる者には如來の姿が見えてなかつたのであり、其人には見えてなくとも佛には見えてゐたのであります。其仕方 of 儘で其人には救ひが下つてゐるのです。然し其人にはそれが不満であり憤死であつても、其姿に於て生さして頂いてゐたのです。本當に如來を知り、如來に見られつゝある事を知つた程歡びはありません』

『俺は此慶事を爲てゐては食つて往けぬ、ツマラン、生活に脅かされる、もつと収入ある社會的地位ある仕事にあり附きたい、そうしたら一つウント味の有る理想をやり抜くがなあ！などと立止つて四顧逡巡して、無駄骨折つてる事が多い。然

し歩き出して見ると周多の人々が私に喰はせずには措かぬ。其慶して貰ふ事を考へてる暇に先づ自ら信する途へ、み意の導き、使命の輝く彼方へ辿つて見るがよい、案外樂に道を先方から啓いて下さる。立つて考へてゐた時には随分六つかしかつた問題が、知らん間に解決されて居り、欲してゐたものが掌を開いて見たら中に握られてゐた事を時々發見するでせう。設計圖を水も漏らぬ程精密に完成して、其れに因つて一分一厘も違はず建築せんとするののも一つだが、又意の趨く儘にそれからそれへと繼ぎ足し遂に一大綜合完成をするのも一途です。藝術的宗教的歩みには、後省の様な「矛盾の眞理」が極めて容易に當然事として成される事が多い。不合理的、天才的、神秘的と怪しまるゝ程不思議方の内面存在を認めずには居れないのです』

『惡を造つても良いだらうか、造つた罪を慶うせう、此慶私は濟まぬ事を仕勝ちの儘で停つてゐても佛の本願は篤いのか知らぬ。否や造るのも陷るのも致方ないもともとそれ以上に出れぬ私だも

の、其麼奴を救ふのが佛の商賈柄だらう。と哲學や倫理や救濟論を繰返し、論理的自己辯護に爰々として一時は解決し得た様でも、付うも本當に落付かぬ宗東學者になつても、哲學者になつても、無生命な安心や哲理の鎧丈けで虚勢を張らうとしても、人は事を自分丈けすら制服する事が出来ぬ。罪の問題を何れ丈け考へ抜いても罪の解決とはならぬ。力の無い私共は罪惡の事は放つて置かう、そして私共の本心の指圖の儘に、如來心の働きの儘に自己の全分を擧げて精進しませう、善と氣附かせて頂いた方へ邁進しませう、そうすれば解決し切れなかつた惡の煩累が自然に解けて行きます。一つ處に立停つて考へてゐたら何時迄經つても決し切れないが、考へる力を振り更へてスタ／＼歩き出した時、其白道に即して最大の悲みが最大の歡喜となり、不満の儘が大なる満足慰安となり救はれて居らない儘に救ひを信じて落付いて努力して行けます。「祈り」の裡に微妙なる統一として此一大事實が顯然として浮き上つて來ます。眞に如來を念じ得る事は最も幸福であり、生命で

あり、解決である。』  
 『然し最後の安定は其麼非論理的な、超自然な妙な「祈り」の闇室に入らねばならんのか、俺は這入る理由が先づ聞きたいと叫ぶ人が多いだらうと思ひます。其麼人に「た、祈れ」と無理に強いるのは罪だと思ひます。説教坊主や牧師は大抵其麼親切者であります。私も其れを怨み呪ひました。が其「祈り」を聽いて祈らぬのも悪い、それよりも祈りを聞かすして本當に祈る人は最も幸せであります。眞に祈りたい氣にならなんだ人が一人でもありませうか。其れ丈けの深刻さ無しで生きて行ける人は慙れむ可きであります。眞に一度でも祈り得た人は其時の様な純な氣分を繰り返す事であり一度もまだ祈り得ない人は自己の内容を環境を直觀熟視して下さい。屹度驚く可き世界が堀り出される事を信じます。商賈人の教へる祈りを眞似する事は愚です。眞似せよとも云ひません。私は私の祈りの内容を以て他の人に押賣りしたくはありません。それが不親切かも知れぬが自ら信じ得るもののみが自らのモノでありますから』

『——と言ふと私は無主義の儘に主義を造つて進めと云ふ事になります。嚴密に云へば無方針無目的であり。多くの主義なり方針なりが常に現實と俱はないからであります。それで其局部丈けを見て常に理想と反する點を氣にし律し切れなかつた時に悲惨事を惹き起すそれで私が恒に刹々刻々に來る一波一條に乗して常に全分の努力と満足とを以て、最善の解決を試みんとし又そうさして貰つて譯けであります。而し此の部分的無理想主義は綜合的大中心の中に各一に飽和されてゆく局部生命體であります。若し總括的大生命大目的を離れては其れ自體の意義も存在もありません、此大統一の背景があるから斯く部分的に全的満足全的躍進が繼げられると信じます。即ち「成佛」と云ふ街道に立つて如來と云ふ大中心、大究竟を目標として進む時、其過程に露はれる凡百の事象は悉く此大理想完成の爲め縁であります。それで佛のみに反した事は一つも與へられず、又私が爲さうとしても自ら制肘する力があります。兎に角惹く力と縋る力が本願と乗托として即一の目

的實現の爲めに大主義を行して行きます。それで全々虚無な刹那生滅的、現實主義、享樂主義にも滯まつて居れません。かと云ふて融通の利かぬ、固陋な規定準繩主義の區々拙劣を學ぶ譯けにも行きません。自ら無中心の中に歴然たる大究竟へ達する白道が輝いて居ります』

『悉くに不満を感じて惱み、悉くに悦びを感じて一切を破却して進みます。靜的には全的肯定であり、動的には全的否定となつて次の肯定に落付かんとて元氣善く進みます。而も善を善とし愛を愛として果たし得ず常により大なる否定のみを擱んでゐます。而して祈りの中に涙し乍らも靈化せられて「み旨」と一つなる境致にまで達せずには已みません』(中野尅子)

ア、良かったと思ふ下から、スグ又次の苦が湧く。もう少し善くなつたら、斯麼事では仕方がないと常に不満を感じ、破壊創造の不斷連續をなしに行く處宗教がある。

### 吾が朋便り (三)

○ 京都 中井常次郎

本日眞生落手いたし早速拜見いたしました。創刊號もすぐ拜讀し御禮を書きたいと思ふ中失念してしましました。今月末和歌山市東徒町五番地の新居へ移る事になり、私のみが今一箇年どうしても學校に止らねばならぬ事態でありますどうか皆様の御意見も聞かして頂きたいと存じます。光明生活第二號「戀愛と宗教」上編は二月中頃原稿を終へましたが、印刷の都合で四月末依頼する事になりました。

○ 静岡 戸崎潜龍

不肖は常に御別時會等にも隨喜任り、解行を策勵仕度存居候へ共、何分目下一日も手放し得ざる事業も有之、洵に遺憾に存居候折

柄本誌の御發行御送付に預り、眞に如來大悲の御善巧感激の至りに不堪候。

○ 浦賀 山田忠一

御上人様の御導きに因りまして如來様の光明の中に暮す事の出来る様になりました。厚く御禮申上ます。何と云ふ歡喜でせう、唯だ此外に何もムいせん。内なる火を益々大きく燃やして如來のみ心に叶ふ様努力いたします。珠數を手の木魚をバスケットに、私も明日信州へ發ちます。

○ 四日市 恒川薫一

罪惡生死の私も大ミオヤ様の御本願を信じ日夜に釋説して至心不斷なれば、永遠より永遠に、眞生の中に安住出来る事を感謝の外ありません、就きましては「眞生」の口繪每號寄贈申度く、萬分の一の

報恩でムいます、原畫の御啓示を切に御願ひいたします。

○ 浦賀 山田英子

日夜信心に心を籠め居り候、病ひの苦惱より脱し候曉には生き甲斐ある生活に入り、如來様の御心に契ふ様働き度くと願ひ居候。

○ 八幡 福井周道

貧者の一燈とやらんと申す眞生の同人諸兄が熱心なる信仰と努力とを遠く微笑みて拜讀しました、少し批評したい事もあるが、批評の様な汚い心は却て眞生の心を穢すものと諦め、有るが儘の眞生を心に抱いて見た、僕の方の雜誌は印刷の都合で四月中頃發刊。

○ 駿河 濱阿彌

私の懺悔録、本當に厭やになりました抹殺したくなりしました。今も或人からの手紙に

前略特に其兩親の子弟教育に極めて無理解なりし状況を記述して誌表するとは何たる不心得か。「純な懺悔は深刻に目醒めたる罪の意識から内泌する。懺悔すらなし得ない深刻なる反省に依てのみ密室にて眞實の無聲として生れ来る。懺悔を表榜する事程無懺悔の甚だしきは無い、危い哉……」。

○ 福岡 大橋とし高

創刊に「森の釋尊」と云ふのがあつた。全くなつかしく見た。但だあの中納と云ふ字が使つてあつた。坊主共の用語として彼れも好か無い一つだ。俺とか私しとか云て貰ひたかつた。あの雜誌の中であれ位の緊張した書物は無い様に思つた。是からもアアしたものを書いて呉れ。

○ 大坂にて 土屋觀道

私も御蔭で道友と共に慈光裡中に修道のことにいそしんでゐます。大坂は此分ならば青年有識の教團として有望の地かと思はれます。次に五月號の原稿も書きたいが寸暇も無い事とて、十日あたり岐阜から送るつもりです。

### 在京の若き婦人方へ

遠慮勝ちな婦人の方々の中には俱樂部で澤山な男の人々と一所に話す事を厭ひなさる傾きが稍々ありますので、そう言ふ方々の爲めにも便利かと思つて、五月中旬から特に私共計り集り得て機會を造りたいと存じます。勿論今の様に皆が一つになつて親しく交るのも大變結構ですが、又私共計りで水容らずに打ち融けた時には、別の

モノが生れる事を信じます。尻込みして穴の中へ逃げ入るのではありません、今の儘の上にもう一つ新しい世界を持ちたいと念うので、そして直接私共に關係する道を以て御指導に預り各自に勧めるのは一層良い事かと存じます。發會の折りは土屋先生に二三日連続でお話しを願ひたいと考へて居ります。場所も山の手の閑靜な處を運びを御返事致しますから。

(自由俱樂部内英子)

□誌代並御祝志頂戴左の如くてあります。

- 二圓 西川龍一郎 ○十六圓 山口まき子 ○各一圓 高橋保平 足立ゆい子 犬山勝政 寺倉精一 中村なか子 井口庄藏

- 量岡のに 林すゑ子 石山淺吉
- 須藤富夫 内田くり 小要利吉
- 井坂あい 永瀧ふさ 山田たけ
- 極樂寺 野村久次郎 諫尾禪隆
- 上坂伊之助 大矢知友右衛門
- 飯ヶ谷保 福山晋一 渡邊保三
- 郎 ○拾圓 清き友會 ○五圓
- 山口多き子 ○六十錢 西岡順
- 恭 ○廿五圓五十錢 井口庄藏
- 三圓 入澤敏子 ○十圓 堤
- 清六 ○六圓函館魯漁會社 ○
- 廿五圓 清き友會廿五名

寄贈雜誌

- 法輪 □ころろ □心の友
- 光 □奉仕 □露西亞藝術
- 更生 □和光 □自働道話
- 明照 □新生 □文化運動
- 願生 □神乃道 □淨明
- 心學道話 □聖書之道

編輯の後に

春の休暇で皆に逃げられ本當の一人ポツチにせられました。四月號は遅れるし私用が山程で歸郷の日も近附いて来る。獨りで氣を揉んでるが寸分も餘裕が無くて、夜俱樂部へ歸ると筆を持つた儘すぐ居睡りして日記も書けません。今度のも電車の中などで短いのは鉛筆を舐ぶり乍ら書き附けて來たのてした。何とも申譯もムいません皆さまからの御叱りと御導きとを頂きたくうみます。

○今の發行部數では殆んど殘本が三四十ですから皆様の手元へも十分御送りする事が出来ません活用の程願ひ上げます。

○誌代は誌上で受取發表するつもりで一々御返事申しませんから不惡。

○誌に對する感想、原稿など御送り願ひます。

光明教壇

(駿河臺茶本間下車明治大學正門右隣)

- 定日講演會 毎金曜日夜 土屋
- 觀道先生其他
- 修養講演會 第三土曜夜 西川
- 光二郎氏其他
- 自由俱樂部
- 每週月水金曜夜 其他隨時
- 金曜夜 土屋先生座談會
- 第三土曜夜 西川光二郎座談會

振替口座東京四七七八番眞生社

大正十一年二月三日第三種郵便物認可

大正十一年五月一日發行毎月一回一日發行

定價 一部十錢 半年六十錢 一年一圓

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土屋 觀道

發行人 眞生 社

發行所 眞生 社

東京市外西巢鴨町二七二番地

印刷人 原 子 廣 宣

東京市外西巢鴨町二七二番地

印刷所 無我山房印刷工場

心の聲

美 和 子

□春ももう惜しくなりました。人生一生もかうして過ぎて行くてせう。お互に人ごとではない、若い内思ふ存分働かねばなりません。教壇から御通知申上げたやうに、是非とも皆様で打ちこけた「心の集ひ」を開いて、一刻も早く如來様のお慈悲にふれて、眞に生き度うございます。氣づいて見れば、久遠の春から如來様に撰ばれた一人一人の私共でしたほんとうに、遠い宿縁を喜ばずには居られません。人生長いも短かいも、如來様に目覺めないならどうにも、かうにもなりません。一日も早く集りませう眞剣でありさへすれば、各自に相應しい道は啓かれるであります。あなたを歸る所にも、私の趣く處にも。

□偽りの多い私にも念佛だけは眞實です。生れて三十年といふ今日、遅ればせながら眞實といふ眞實を味ははせて戴いた此の事實、有難涙に咽びます。

絶體なる如來様の御前には、隠す所が無いからです。他人から偽はられるといふことは、一面、自分に嚴肅な誠が體驗されてないからだ、とも言はれませう。

世の中の偽りを清淨めるのには、學校の修身や倫理や、社會の道德などあまりに力が弱すぎます。唯々念佛一道のみ草正の光です。

□人生の目的、理想を如來様に發見して、只管如來様のやうに忠實々々しく立ち働く。かうした時かういふ場合、如來様が今の私であつたら、どう解決なさるだらう、如何なる最善を盡されるであらう。と常に如來様ばかり思ふ所の心、如來様の救ひを自己の上に事實にすることの外、何物をも思はぬ所の日暮し、之がほんとの眞生だと信じます。

\* \* \* \* \*

大正十一年二月二日第三種郵便物許可大正十一年四月三十日印刷納本大正十一年五月一日發行(每月一回一日發行)